

年報第5号の刊行によせて

池 田 秀 男

(日本生涯教育学会理事)
(広島大学)

大学1年のとき教えたことが、卒業の時点では役立たないものもある。これは、かつてM. ミードが生涯教育の必要性を提唱したさい述べた言葉である。

この学会の年報も本年は第5号である。この間に、国レベルでは生涯教育についての答申が出され、地方レベルでは各地で生涯教育への実践的取り組みが行きわたりつつある。最近では生涯教育に関する各種の提言や報告も、単に教育学関係の書物や論文だけでなく、生活、福祉、文化関係の文献や各種の白書類はもちろん、産業、労働、医療、地域開発などに関する文献の中でも、ごく普通に見られるようになった。既にかんがりの実践記録や本格的な理論書も出現している。しかもそれが世界の動向となっている。

こうした国の内外の動きを見てみると、生涯教育は今や新しい時代の方角を示すものであることがわかる。このような時代の動きを背景としながら、この学会もここ5年間に1つの学術研究組織としての性格とイメージを明確にしてきた。特に最近になるほど、学会及び学会員の研究活動と実践活動は活発になり、これに対応して学会の内部組織も一段と強固になってきている。

この年報は、こうした本学会及び学会員の研究と実践の成果をまとめて公表するもので、本学会活動の水準と内容を世に問うものである。それだけに

学会の諸活動の中でも、この年報は重要な意味をもっている。

今年度の年報の特集テーマは「地域の中の生涯学習」である。かつて生涯教育の概念は教育の諸部分を統合する傘概念ないし親概念のレベルにあったが、今日では人びとの生涯にわたる学習、すなわち「生涯学習」を支持・改善・促進する組織的計画的な援助活動として結晶化してきている。したがって生涯学習の概念こそ生涯教育を実践化し具体化する鍵概念だと見られている。

生涯学習は、生涯の全段階（lifelong）を通して、しかも全生活関連（lifewide）の中で行われ、かつ究極において個人の自主性と主体性に依存する。このことに着目すると、生涯学習は「自己管理的学習」（self-directed learning）であると言ってよい。この文脈では、生涯教育は自己管理的学習への教育援助によって、人びとの生涯にわたる人間の完成と生きがいの創出を目指すものと言える。

人びとの生涯にわたる継続学習はその人の人生や生活を決定する重要な要因であり、その限りにおいて生涯学習の質は人びとの人生や生活の質を決定する。この学習と人びとの人生が具現される場所は、ともに「地域の中」においてである。地域は個人の活動だけでなく、家庭や学校をも内に包む生活の基盤であり、生涯学習を身近かなところで日常的に展開する舞台である。この点で、生涯学習は地域に、これを支援する体制やこれを促進する教育資源が豊かに整備されているか否かに左右されるところが大きい。このための条件整備が地域の生涯教育推進方策の課題である。

このように見てくると、地域は生涯学習を日常化し実践化する最も重要な教育的環境であって、生涯教育は結局「地域の中の生涯学習」への組織的援助からはじまるのである。

人びとの能力や資質の開発は学習に依存する。その学習は人びとが生活する地域の教育資源の豊かさに依存する。その限りにおいて人びとの能力の開発と活性化は、根本においてその地域における生涯教育の浸透と実現によるものがあり、地域生涯教育の施策化は地域発展への最も信頼できる政策課題

たりうるのである。

この年報に掲載されている各地域の生涯学習に関する研究や実践は、こうした生涯教育と地域との関係や、その在り方を考える上で多くの示唆を与えるに違いない。

1984年9月